受験生の君へ

開成中学校・高等学校

「開成学園を受験しよう」……皆さんが、そう思ったのはどういうきっかけですか。
「塾の先生に薦められたから」「偏差値が高かったから」「進学実績がよかったから」……
いろいろなきっかけがあると思います。どんなきっかけでもよいと思います。私達は、開成学園に進学して学びたいと思う皆さんを、楽しみに待っています。

しかし、一方で、私達は、皆さんに、「ぜひ開成学園をよく知ってもらい、好きになってもらって、受験してほしい」とも思っています。せっかく受験するならば、偏差値や進学実績といった数字だけで判断するのではなく、開成学園の校風を好きになった上で、この学校を選び、受験してほしいと思っています。少しでも開成学園の様子を皆さんに実感してもらいたい、そんな気持ちで、このリーフレットを作りました。皆さんが受験する学校や進学する学校を決める参考にしてもらえれば幸いです。

開成学園の校風として、よく語られることに、「開物成務」「ペンは剣よりも強し」「質実剛健」「自由」の四つの言葉があります。それぞれ、どのような意味なのでしょうか。そして、どのように開成学園の生活に反映しているのでしょうか。

「開物成務」というのは、開成学園の校名の元になった言葉です。紀元前7世紀の中国の書物『易経』にある言葉で、日本語式に読めば、「物を開き、務めを成す」となります。「物」とは、ここでは、「人物」のことを意味します。従って、「物を開き、務めを成す」とは、「人としての知性・人間性を開発し、人の成すべき責務・事業を成し遂げる」という意味です。勉強にたとえるならば、「学力を充実させ、自らの人間性を開発し、自分の将来・人間の未来に役立てる」といった意味になるでしょう。開成学園では、この「物を開く＝知性・人間性の開発」を大切にしたいと思っています。

例えば、生活指導を例にして考えてみましょう。開成学園の生活指導は、「細かい規則」に依った画一的なものではありません。校則も服装に関する規定がある程度で、最小限のものとなっています。これは、規則に頼ることなく、「どうしていけないのか」ということを生徒自身にしっかりと考えてほしいという開成学園の生活指導の理念の表れです。「やっていいこと、やってはいけないこと、その理由を、自ら考え理解する(知性・人間性を開発する)ことで、成すべきことを務める(成務)」、これが開成学園の生活指導の基本となっています。もちろん、生徒が過ちを犯した場合は、私達は本気になって叱ります。しかし、そんなときにも、「どうしていけないのか」を、生徒自身にしっかりと考えてほしい、そして「生徒自らが成すべきことを務める」ように育っていってほしいと願っています。

次に「開物成務」について、学校生活の中で最も長い時間を占める日々の授業を例に、考えてみましょう。皆さんは、現在、厳しい受験勉強で学力を磨いていることと思います。進学すると、いよいよ本格的な勉強が始まります。しかし、開成学園で皆さんを待っているのは、「本格的な受験勉強」ではありません。「本格的な学問」です。「物を開く(自分の知性・人間性を開発する)」ために、深く腰を据えて、じっくりと学問を見つめてほしいと思っています。与えられた問題を解くことも大切ですが、開成学園では、自分で課題を設け、研究し、レポートを作り上げるような勉強(学問)の機会が、多く訪れます。

また、開成学園には進度別のクラス分けはありません。それは、「物を開くこと(知性・人間性を開発すること)」には、「進度」はないからです。あるとしたら「深度」でしょう。目先の「進度」に追われることなく、皆さんには「学問の深度」を深め、「物を開くこと(知性・人間性を開発すること)」に、じっくり向き合ってほしいと思っています。そして、そこで得た力を、皆さんの将来に、人間の未来に役立ててほしい(成務)と、願っています。

二つ目の「ペンは剣よりも強し」というのは、19世紀のイギリスの作家・政治家のE. B. リットンの言葉です。「開物成務」と並んで、開成を表すものとして、校章にもなっています。「ペンは剣よりも強し」という言葉が「物事を成就したり、問題を解決したりする方法としては、武力よりも言論(文化)の力の方が強い」という意味であることは、皆さんも承知していることだと思います。では、開成学園の生活に、この「ペンは剣よりも強し」はどのように反映しているでしょうか。

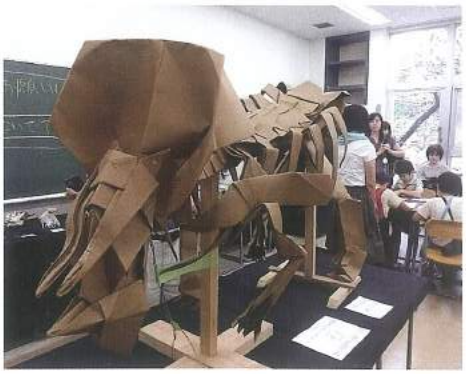
皆さんは、開成学園大運動会を見たことがありますか。見たことのある人は、応援団の華やかで勇ましい姿に、きっと驚いたことと思います。最上級生の高三生徒は、時に大きな声を出して、下級生を、叱咤激励します。そんな応援団の中心になって指導する責任者は、一見、強面の勇ましい人にも見えます。けれど、運動会の様々な責任者に選ばれるためには、勇ましさだけでは、決して十分ではありません。仲間を勇ましく盛り上げながらも、一人一人の気持ちを思いやることのできるような優しさを兼ね備え、そして下級生に対しても、暖かく、時に厳しく導くことのできるような、そんな指導力を持った者が、仲間達による厳しい選挙を経て、責任者に選ばれていくのです。

前年度の運動会が終わって間もなく、次の運動会をより素晴らしいものにするための議論が生徒の間で始まります。組の団結・競技のルール・安全対策・下級生の指導法……そういった数々の議論(言論)を経て、仲間達の気持ちをまとめながら、ようやく責任者が決まっていくのです。選挙の仕組み自体も、自分達で議論しながら決めていきますから、すべての運動会の責任者が出揃うのには数ヶ月もかかります。責任者が決まった後では、いよいよ本格的な話し合いが、生徒の間で、生徒と先生の間で繰り返されます。そのようにして、開成の運動会は、一年がかりで、出来上がっていきます。

ともすると、勇ましさ(武)が目立ちがちな運動会ですが、実は、たいへん地道な言論の積み重ねで出来上がっているということを、皆さんにも知ってほしいと思います。例えば、こんな運動会の例も、「ペンは剣よりも強し」の表れかもしれません。

三つ目の言葉、「質実剛健」というのは「外見を飾ることなく内面が充実していて、たくましく揺るぎようがない様子」を表す言葉です。「質実剛健」の例には、「開成祭」の話をしてみようと思います。

開成学園の文化祭(開成祭)は、毎年、多数の来客で賑わうとても華やかな行事です。一見「質実(外見を飾らない)」とは関係のないもののように思うかもしれません。しかし、開成祭の催し物の一つ一つを見てみると、「既成のものに頼らない自分達自身の手作り」の部分を発見できるはずです。ゲームを企画するような団体一つとっても、既成のテレビゲームを並べて、それでおしまいというような参加団体はありません。例えば、近所から空き缶を何百本と集めてきて、自分達の手で一つずつそれを洗い、自作ゲームの材料に作り上げた参加団体もありました。コンピューターを使うような団体では、自分達で製作した木琴ロボットを、自作プログラムで自動演奏させたり、剣道ロボットを遠隔操作で闘わせたりします。独創的な巨大折り紙を製作展示するような団体もあります。



皆さんの身の回りに、「手作り」の物はありますか。あったら手にとって触り、じっと見つめて下さい。質素な外見の向こうに、「そのもの」にこめられた作り手の思いが感じられるはずです。それは、大量生産されるものには感じられない「たくましく揺るぎようもない価値」でしょう。このような「質実剛健」な参加団体が開成祭にはあふれています。

もう一つ、開成祭の名物行事を紹介します。「古本市」です。1977年に生徒が企画して始めた時は、小さな催しでしたが、今では、生徒をはじめ、教職員・保護者・近隣の方から集まった古本で、一万冊以上の古本が展示販売されるようになりました。収益金は、災害被災地や発展途上国の援助等に寄付されています。その寄付先についても、単に前年に倣うのではなく、毎年、生徒が企画・検討しています。地味な企画ですが、大変充実した内面を伴った姿に、毎年毎年の生徒が育てあげました。

このような参加団体や、古本市の話は、いずれも一例です。このように、「内面を充実させよう」という風土は、開成祭の隠れた、しかし大切な一面になっています。

最後に「自由」という言葉について考えてみましょう。「自由」というのは、今まで述べてきた三つの言葉よりも、聞き慣れた言葉かもしれません。しかし、この言葉は最も難しい言葉かもしれません。

例文を二つ挙げてみます。
「ここでの写真撮影は自由です」
「いくつもの変化球を自由に投げ分けることができる」
どちらも同じ「自由」という言葉ですが、少し感じが違うのが分かるでしょうか。一つ目の「自由」が、「制限するものがないこと」を指しているのに対し、二つ目の「自由」は「自分で自分のやりたいことを決められること」を指しています。一つ目の自由が、「もともと与えられている自由(受け身の自由)」であるのに対して、二つ目の自由は、「努力して手に入れる自由(積極的な自由)」であると言ってもいいでしょう。
そして、開成学園にある自由は、もともと用意された「受け身の自由」ではありません。自分で手に入れる「積極的な自由」です。開成学園の生活の中で、生徒は「自分で自分のことを決められるという自由」の機会に、数多く出会います。

例えば、修学旅行やクラブ活動を例にしてみましょう。
皆さんは、今までの学校生活のなかで、旅行の行き先について自分達で決めたことはありますか。どこでどのような見学をして、何を学びたいか、自分達で決めたことはありますか。
開成学園の修学旅行は、「自分達で学ぶ対象や目的を決めて、自分達で行き先を決める」ことから始まります。生徒の旅行委員会が、学年担当の先生達と相談し、学年生徒全体から意見を集約し、アンケートを繰り返す中で、行き先や、学ぶ対象・目的を設定していきます。開成学園の修学旅行は、単なる数泊の思い出作りの旅行ではありません。数ヶ月にわたる自分達の学問の成果の場として、学年全体で作り上げていく手作りの「自由な旅行」なのです。
そして、そのような「積極的な自由」に満ちた旅行が実現するためには、何よりも「自主的に動く力」と「自分で律する力」が必要不可欠です。人任せでは「積極的な自由」は手に入れられません。自分で自分を律することが出来ず、勝手し放題なら、あっという間に、「積極的な自由」はどこかに消えてしまうでしょう。
「自主的に動く力」「自分で律する力」を基に、開成学園の「自由」は育ってきました。例えば、開成学園には、60を超える部・同好会がありますが、これも生徒が自主的に企画・設立し、自ら律して運営してきた努力の積み重ねによるものです。生徒は多彩な選択肢から自分に適した活動の場を探し、それぞれの場で個性を発揮しています。自ら新たな活動の場を作ることも可能です。「自主・自律」の礎に、ひとつひとつ築き上げてきた、豊かな「自由」という財産が、開成学園の宝物です。
この「積極的な自由」を開成の素晴らしい伝統とし続けるために、生徒はいろいろな場面で奮闘し続けています。先生もその姿を信頼し、後押しして、ともにその風土を守り育てていこうと、努力し続けています。

長くなりましたが、開成を表す四つの言葉「開物成務・ペンは剣よりも強し・質実剛健・自由」について、具体的な生活の場面や行事を中心に述べてみました。もちろん、どの一つの言葉をとっても、この限られた紙面では表現し尽くすことのできるものではありません。そして、開成学園の多くを知ってもらうには、この一枚のリーフレットどころか、幾千の言葉を費やしても不可能でしょう。
私達、開成に携わる者も、
「開物成務とは？」
「ペンは剣よりも強しとは？」
「質実剛健とは？」
「自由とは？」
と、問い続けているのです。そして、
「開成学園とは？」
と、問い続けているのです。
この答えの出ない問いかけに、長い時間をかけて、共に挑み続けてみませんか。
そんな皆さんを、私達は待っています。